

野檻襖菊（ノボロギク）

須藤 健一

キク科キオン属の一年草～越年草。全国の畑、樹園地、転換畑、道端、空き地など、至る所に見られる。ヨーロッパ原産の帰化種で、日本へは明治初期に入ったとされる。

茎は中空で背丈30～50cmほど、多数分枝して株になる。葉は茎に互生し長さ3～6cm、幅1～3cm、不規則に羽状の切れ込みがあり、基部で広がって茎を抱く。濃緑色で光沢とやや厚みがあり食用のシュンギクに似るが、セネシオンというアルカロイドを含みこちらは食用に向かない。

通常5月から8月に花を咲かせるが、暖かいところではほぼ一年中花を咲かせている。花は0.8～1.2cmほどの頭状花で、ふつう筒状花だけが集まるが、まれに舌状花もみられるそうである。花の基部を総苞が包み、総苞の外片は上半分が三角状に黒くなり、見分けるための指標にもなっている。果実は瘦果で種子には長い白色の冠毛があり風で散布される。

ノボロギクの名は「野+檻襖+菊」ということであり、ひどい名前を付けられたものだと思う。牧野富太郎によると「野檻襖菊」は「檻襖菊」に似て野に生えるからだといい、「檻襖菊」というのは頭花が集まって開花している様子が、「檻襖」布が集まった状態を想像させるため、とある。

ところで、その「檻襖菊」は日本在来の「サワギク（沢菊）」の別名である。サワギクは枝分かれした茎の先端に、5月から8月頃に直径1.2cmほどの鮮やかな黄色の花をたくさん咲かせる。しかもその花はノボロギクと違っていわゆるヒマワリ型の花であり、中央に花びらの付かない筒状花を密集するが、外側には花びらを持つ舌状花が10枚ほどつく。同じく牧野富太郎によれば山間の沢に咲くからサワギクというところがあるが、なかなか美しい花である。花が終わって白い冠毛が付きだしたとき、まだ黄色い花が残っていたりもするが、そんなときには何となく檻襖布のようにも思えなくもない。しかしそれを檻襖布というならキク科の多くの花が檻襖布になってしまうのではないかと思うのだが。中村浩氏は、ボロギクのボロは檻襖ではなく古代の武具である「そぼろ」から転じたものではないか、という。

ノボロギクを分類するとき、一つの着眼点の花の形である。頭花であるノボロギクの花は、舌状花をみることはほとんどな

く、ほぼすべてが筒状花である。同じようなボロギクで筒状花だけの花はほかにペニバナボロギク（家畜の餌や海外では野菜として利用されている）、ダンドボロギク（愛知県段戸山で見つけられたためダンドの名が付けられている。パイオニア種であり開けた場所ですぐに生育する。この種が綿毛を付け雨などに濡れているのをみると「檻襖」といってもいいかもしれない）があり、それぞれ花が咲いている時期も、花の色も異なる。ノボロギクが春からほぼ通年に渡って黄色い花を咲かせるのに比べ、ペニバナボロギクは8月頃から10月頃まで紅色の花を付ける。ダンドボロギクは9月から10月頃に黄色から白っぽい花を付ける。花の形が似ているにもかかわらずこの3種は属が異なり、ノボロギクは *Senecio*（キオン属）で、ペニバナボロギクは *Crassocephalum*（ペニバナボロギク属）さらにダンドボロギクは *Erechtites*（タケダグサ属）である。もう一つ、ほぼ筒状花のボロギクにアレチボロギクがある。ノボロギクと同じキオン属であるが、総苞片の先が黒くならないので区別できる。

因みにボロギクの本名(?)であるサワギクは *Nemosenecio*（サワギク属）である。ボロギクという同じような顔をしていても「姓」は違っている。

